

## 三位一体主日礼拝説教 「あなたは神の子」

日本基督教団石神井教会 2018年5月27日

### 【旧約聖書日課】申命記 6章4～9節

<sup>4</sup>聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。<sup>5</sup>あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

<sup>6</sup>今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、<sup>7</sup>子供たちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。<sup>8</sup>更に、これをしるしとして自分の手に結び、覚えとして額に付け、<sup>9</sup>あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。

### 【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 8章12～17節

<sup>12</sup>それで、兄弟たち、わたしたちには一つの義務がありますが、それは、肉に従って生きなければならないという、肉に対する義務ではありません。<sup>13</sup>肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし、霊によって体の仕業を絶つならば、あなたがたは生きます。<sup>14</sup>神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。<sup>15</sup>あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。<sup>16</sup>この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてくださいます。<sup>17</sup>もし子供であれば、相続人もあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。

### 【福音書日課】マルコによる福音書 1章9～11節

<sup>9</sup>そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。<sup>10</sup>水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。<sup>11</sup>すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

## 神の霊に導かれて

先週のペンテコステ（聖霊降臨日）は、洗礼式・堅信式が執り行われたこともあって、多くの皆さんが共に聖霊降臨を祝う礼拝へと集められました。実は、先週の9時からの礼拝は、普段と比べて集まりが悪かったのです。どういうわけか、いつも来ている子どもたちも休みが多かった。10時半からの礼拝も少ないのではないかと危惧しながら時間を迎えたのですが、前奏が始まるころにはすでに混み合い、遅れて来られた方は座る席を探すのに迷われているほどとなりました。まさに「聖霊の風」に吹き集められて来られたようにして、多くの皆さんがペンテコステの祝いの礼拝へと集められていらしたのです。

その「聖霊の風」に吹き集められて来られていたみなさんは、今日も「聖霊」に導かれてここにおいでになられたのでしょうか。

牧師はつい「祝いの後に続く礼拝には休む方が多い」と考えがちです。特に今日は、わたしたちの教会で午後、コンサートを予定していますから、もしかすると午後に備えて午前中は失礼する、などという方もあるのではないかと、想像しておりました。「数」が気になるのです。俗な思いもありますが、それは聖なる思いでもあるのです。二千年前の最初のペンテコステの出来事から始まった教会の物語が、使徒言行録に伝えられています。弟子たちの集まりは最初、120人ほどだったのです。それが、ペンテコステの日、弟子たちのもとに聖霊が注がれると、その日のうちに彼らの教会は3000人の集まりになりました。それからしばらくして、彼らの教会は男だけで5000人も集まるようになっていたと語られています。それは、少し大げさな数なのかもしれません。けれども、それがたとえそうだとしても、そこに聖なる思い、神の思いを見て物語ったのが、初代教会だったのでしょう。だからこそ、わたしたちも、聖なる思いを尋ねながら、「数」を気にするのです。「今日は、何人が集まるだろうか」と。

もちろん、数が多くても少なくても、わたしたちは皆、やはり「聖霊の風」に吹き寄せられて、ここに集められているのでしょ。午後のコンサートのためにおいでくださった方もあります。それぞれにご自分の中に目的があつておいでくださったのでしょ。それでも、皆さんはやはり、「聖霊」の導きがあつてこそ、ここに集められて来られたのです。何となれば、わたしたちは、ペンテコステを祝った教会、聖霊の注がれたことを信じる教会なのですから。

わたしたちは、聖霊を信じます。聖なる神の霊のお働きを信じます。もちろん、それは、何か神霊現象を信じる、というわけではありません。いわゆる「スピリチュアル」と称する人たちがしているように、霊界と交信して見せるようなことも、いたしません。聖霊のお働きとして「異言」を語るという者はあるかもしれませんが、しかし、それとて聖霊によって与えられる賜物の一つにすぎませんから、聖霊を信じる者がだれでも操れるようなものではありません。オカルト好きの人が期待するようなことはほとんど何もありませんが、それでもわたしたちは、聖霊を信じる。聖霊のお働きを見る。教会の営みの中で、信じる者の交わりの中で、聖霊が確かに働いていることを見て、信じているのです。

## 「アッバ、父よ」と呼ぶ

今日は、教会暦では「三位一体主日」と呼ばれます。先週のペンテコステには、皆さんが「赤」のしるしをもって祝っていただきましたが、今日は「白」がしるしの色です。「父・子・聖霊」なる神のご栄光を表す「白」です。わたしたちがペンテコステに見た「聖霊」の「赤」は、神のご栄光の輝きの中で「白」く見えるのでしょうか。けれども、今日わたしたちが見ている「白」のしるしの中には、間違いなく「聖霊」の「赤」が含まれている。この「白」の中に、わたしたちにも注がれ満たされている「聖霊」が含まれている。いいえ、大胆に言えば、この「三位一体」の「白」の中に、わたしたちも皆、組み込まれているのです。

それは、少し言いすぎでしょうか。わたしたちが畏れも知らずに自分を神の地位にまで高めようとする愚かな言い方でしょうか。

たしかに、わたしたちは、自分を神とする間違いを犯すべきではありません。申命記の日課は、イスラエルの人々の信仰の核心とも言うべきことが告げられる箇所初めの部分です。「**我らの神、主は唯一の主である**」と始まるこの章の言葉を、ユダヤ人であれば幼い時から暗誦し、朝夕の祈りで唱えてきたそうです。主イエスも、おそらくそうなさっていたのでしょうか。そこで、心に留めなさい、子供たちにも繰り返し教えて聞かせなさい、と命じられるのは、イスラエルの人々が、彼らを導いてくださった主を唯一の主としておぼえて仕え、他のどんなものも神としてはならない、ということです。具体的に言えば、神が為してくださったことを、あたかも自分自身で実現したかのように思ってはならないのです。人は神ではないからです。人が神となっははいけないからです。

それは当然です。しかし、そうだとしても、わたしたちは、神が人に為してくださったこと、今も為し続けてくださっていることを、勝手に制限してしまうわけにはいきません。神は、「天の父」として「御子キリスト」を地上にお送りくださったのです。「御子キリスト」を通して、キリストに結ばれた弟子たちに「聖霊」を与えてくださったのです。わたしたちを、「聖なる神の霊」の宿る「宮＝神殿」としてくださったのです。わたしたちは、キリストと結ばれるばかりでなく「聖霊」とも結ばれ、それゆえに、「天の父」とも結ばれ、神のご栄光にあずかる者とされたのです。神がそのように為してくださっていることを、わたしたちが否定する理由があるでしょうか。

「しかし、本当に、わたしたちに聖霊が与えられていると言えるのだろうか」と問われる方があるかもしれません。使徒パウロも、そのような問いに向き合ったのかもしれません。しかし、パウロは、明確に答えました、「わたしたちは、神の霊を受けたから、『アッバ、父よ』と神をお呼びする祈りをささげることができているのではないか」と。

「父よ」とお呼びして祈る。主イエスが弟子たちにお教えくださったことでもありました。神を「父よ」とお呼びする。それは、自然なことではありません。当たり前のことではありません。それは、ただ、神がご自身の霊をお与えくださり、その霊をわたしたちが受けとめることができたときに起こる、奇跡なのです。

## 「あなたも神の愛する子」

先ほど牧師が「天の父」と神をお呼びしてささげる祈りに、「アーメン」と同意してくださった皆さん。あるいは、この後、「天にまします我らの父よ」と「主の祈り」をご一緒に唱えてくださるであろう皆さん。皆さんの心に、その口に、神をお呼びする「父よ」という言葉を授けてくださったのは、神の霊なのです。神が雨のように注ぎ続けてくださる聖霊を、キリストという通路を通して受けとめることを教えられて、わたしたちは、**神の霊によって導かれる者**となりました。わたしたちは、神を「父よ」とお呼びする者、「神の子」として生きる者にされたのです。

いつから、そうなったのでしょうか。いつから、大胆にも自分が「神の子」なのだと考えてよいことになったのでしょうか。わたしたちは、それは「洗礼」を受けたときからだ、とお答えすることが許されるでしょう。

主イエスは、神の国の福音を宣べ伝え、弟子たちを従わせる公生涯の歩みを始められるにあたって、洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられました。洗礼者ヨハネが多くの人々に授けていた「悔い改めの洗礼」の儀式をお受けになられたのです。そのとき、主イエスは、まだ弟子たちを従えていませんでした。けれども、そのときのことを弟子たちにお語りになられたのでしょうか。そして、おそらく、ご自身のお受けになられた洗礼の儀式の中に、新しく二つの事柄を見出すようにとお教えになられたのです。一つは、主が洗礼をお受けになると天から聖霊が降り留まった、ということです。もう一つは、そのとき同時に、天から「あなたは神の愛する子」という宣言が告げられた、ということです。

なぜ、主イエスは、そのようなことをお教えになられたのでしょうか。主イエスは、ご自分の亡き後に、弟子たちがご自身に従う者として歩み始めるとき、ご自身と堅く結びつくしるしとして洗礼を受けるようにとお命じになられました。そのとき、主と結びつく洗礼を受ける者が、主がお受けになられた洗礼の中で示された二つの事、聖霊授与と「神の子」宣言を自分自身のこととして見出すようにしてくださったのではないのでしょうか。

死んで三日目にご復活なさった主イエスは、弟子たちに大宣教命令をなさいました。「**あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け**」（マタイ 28:19）なさいと命じられました。「父と子と聖霊の名」によって授けられる洗礼。それは、主イエスがお受けになられた洗礼にほかなりません。それは、わたしたちが聖霊を受け、「神の子」と呼ばれて生き始めるしるしとなる「洗礼」なのです。

この「洗礼」に、すべての人は招かれているのです。神の聖霊の導きを信じて生きる道、神の子として生きる道に、すべての人は招かれているのです。それを、すべての人に伝えるのは、すでに洗礼にあずかった「神の子」らである皆さんの役目です。御子キリストによって、弟子たちは「神の子」とされました。わたしたち「神の子」とされた者によって、すべての人が「あなたも神の愛する子」と呼ばれるようになるのです。